

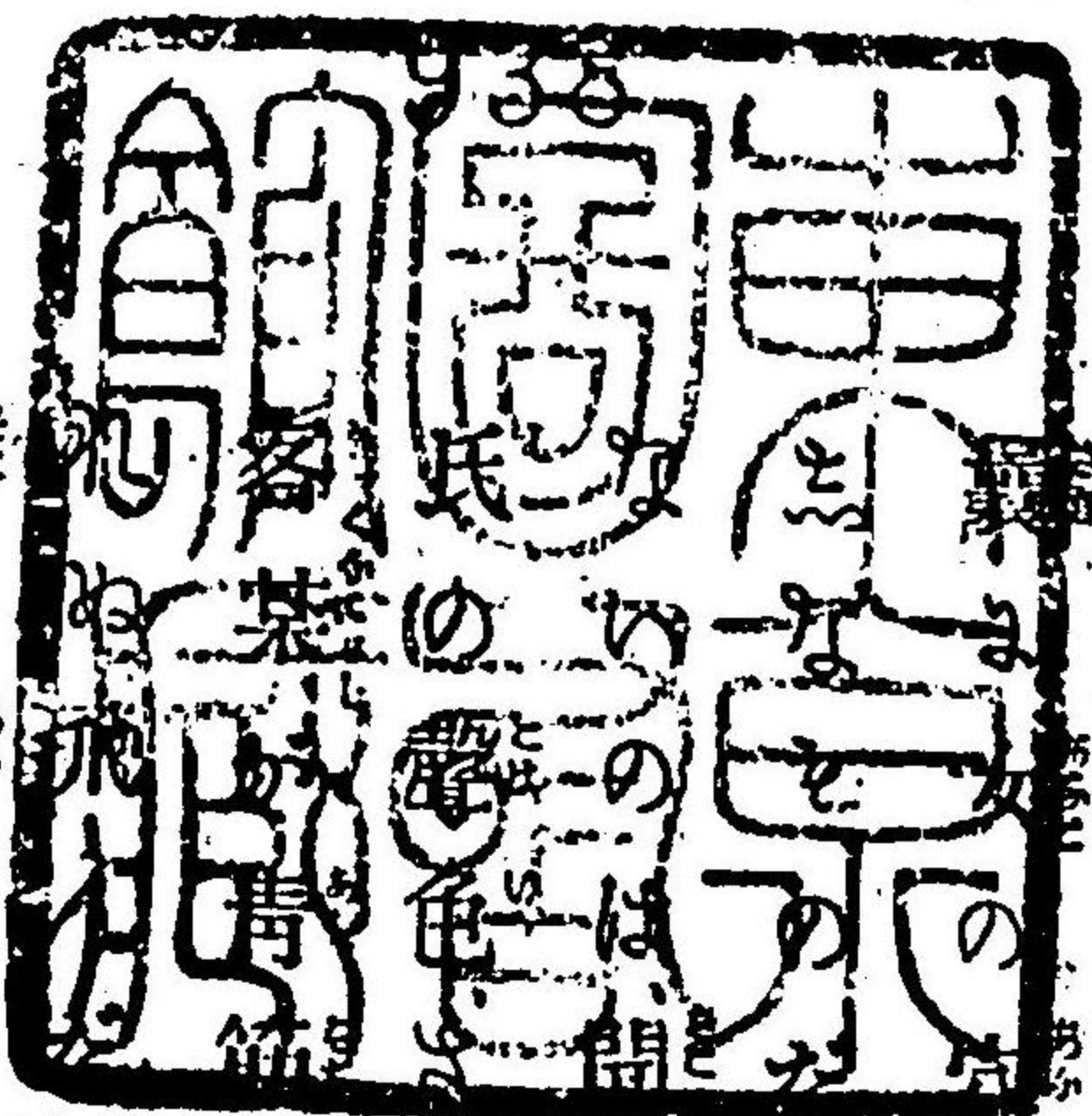
素鐵公戲著

# 鱈

全

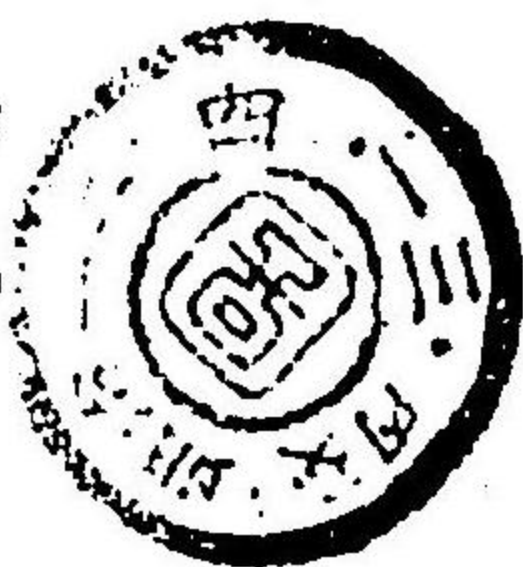
大阪 綺文館發兌





えんがた

がシカシ藪を突つて蛇毛を吹て疵作者自身の内幕  
 乃て穴の續篇即ちあらし書くこと、致しまいと、  
 立ての詰問、ユイツ迂濶に聞ては居ら  
 りとは依怙乃沙汰ぢやゲエせんかト、  
 女ばかり悪く言つてサテ男をけなさ  
 に出來たから男の穴乃無いのは可笑  
 いたユリヤ一件復讐の腰だか社會燈





も、どうやら書ふやゑるまいよ、ハテ困ッた事だ、

宇年の暮れ大晦日の取  
越苦勞を頭痛に病乍ら

素 鐵 公 誌 す

魚荒

續篇目次

第一回	男	第六回	滑稽者
第二回	旦那附車夫	第七回	商人
第三回	下男	第八回	職人
第四回	食客附鰍夫	第九回	役人附兵卒
第五回	俳優	第十回	僧侶

目次乃外 男らとい男



鮫 及び穴の爲に

或時ある大通人が遣ッて來まし、シテ申しまする  
 には貴公は先頃穴といふ書物を作ッたそうだが、一  
 體不粹極るては無いか、止せ、第一は乳愛を缺き、  
 第二は閨愛を缺き實は宜しくある事だ、先づ考へて  
 み玉へや貴公が女の穴を穿つ時は母たる人乃事  
 を發くやうな事が出來するし、又は妻君は來人がな  
 く藝娼妓は振られる様な事が出來するぞ、實は不道  
 徳極ッ、と話して無いか、どうだ、ユリヤ素鐵公返事はナ  
 ンナント、

乃公を笑ひまして、ソシテ答へました、コレをしたり、  
 貴公なんちふ事を云ふ、古へ乃所謂る、聖人君子達を  
 見る、眞面目て人の穴を穿ッたてあいか、論語ても孟  
 子ても皆な世の上人の事は屬する穴を穿ッたもの  
 ぞ、只上品よ云ふか、下品よ云ふかの差別があるば、  
 りだ、ソユの處を篤々考へて見い、乃公が穴を書いた  
 乃も、滿更ら貴公が云ふ様な事では有まい、  
 大通人欠伸を考へ、歸ッて終ひました、後て乃公も  
 熟々考へまして、ソシテ決心しました、エ、隨意よ、ど  
 うもらう、コレでも勸善懲惡の助なるかも知れな



あらを自分て書く

素

鐵

公と云ふ男

ト申す者は自分

まゝ おき

あらの解末葉に花山長者が跋文が有ますか  
 ら、別よ之を申上ません、サテ男と云ふ者は、  
 マット昔から弱い女に對して、意張り散して  
 居ました、悪さも悪どあよ男よ價値が有ま  
 すぞ、裸百貫とはソリヤ昔のこと、開けゆく文  
 明の世よ、男女同權の風ふき靡いて來る時よ、  
 ナンノ女が然うく遠慮する事が有らうぞ、  
 いのイデ作者が亭主じゃ旦那じゃト云ッて、



意張ッてゐる男の、面の皮を剥て呉れうから、  
世乃淑女達を、穴の舊怨を思えかいて、サレ續  
いておじやれ、イザ

鯨

柔 鐵 公 戲 著

第一回 男

榮啓期といふ唐人乃、一ツの樂だとも、男も生れたのえ  
……………シテみると、男といふ者は、面白い者らしい、がシ  
カシ實際ううては、生れるからよや、女サ、横町の妾  
宅お羨ましいぢや、ゲエせんか、ダカ……………  
男が宜しいか、女が宜しいかト云ことは、容易よ決しな  
い問題で、チヨット一段物としては、語り切ないテ、ソ  
ふ事を云出すと、哲學論乃やうよ、七面倒よなるから、先



男と云ふ者は角張った愛嬌のない武骨な飾氣の  
者です言え、人間乃中では極水ッぽい者です時とし  
ては非常な有情で、時と志ては非常な無情です物と對  
志ては荒々しいが女に對しては優柔いのが總ての情  
です大概な男の根性です。

男ほど奇麗な者はない、男ほど嫌らしい者はない、男ほ  
ど可愛い者はない、男ほど淡泊な者はない、男ほどヒ  
ツコイ者はない、男ほど無茶な者はない、男ほど優しい  
者はない、男ほど義の固い者はない、男ほど心乃變り易  
い者はない、ト云ふも女の評を區々ですよ。

男ほど奇麗な者はない、

女から云せると男には癸水を云ふものが無いから、  
ソレで奇麗だと云ふのです尤も癸水を婦人乃大役で  
すから婦人の多くは之を嫌ふて之が無ッたら何おも  
ふト云ふてゐます、ソシテ又男よえ産と云ふものが無い  
から女の懐胎乃者は男ほど樂な者はないト云ふてゐ  
ます、コリヤ無理では有ません。

男ほど嫌らしい者はない、

男と云ふ者は意地の強い者です、一旦言出すと飽迄も  
之を通さうと思ふ根性が有ますから可愛さ餘ッて惡  
さが百倍いやければ嫌がるほど附纏ふて、女も持餘す



事が有ります、即ち斯なるから

男ほど可愛い者はない、

可愛い男よ、妾や命でもソレ程も可愛い者です、尤も其可愛がられるのも、只男振ばかりじゃムいません、

男ほど淡泊な者はない、

サ之が大概女の氣に入るので、真佳人と一對の眞才子は此風かのです、ベチヤクチャ忘れた男は、ホントは氣障な者です、今女よ三行半を遣たり、ソシテ女をスツパリ思ひ切るな、心は淡泊してゐるから、出來る藝です、實云ふよ、之が男の本色です、シカシ男のヒツコイの來ちや、男ほどヒツコイ者はない、

男ほど無茶な者はない、

物事の間違つたとき、色戀の叶はぬとき、男ほど無茶な者は有ません、尤も無教育な女の様よ、有ません、カシ刃傷などは、男から惹起す事が多いです、又女の髮の毛を切たりするのも、得てして男です、

男ほど優たい者はない、

男ほど義乃固い者はない、

男ほど心の變り易い者はない、

妾が病氣で寝て居たら、何でも食べぬ、藥でも其優さよ、引替へて今日の邪慳な氣が知れぬ、ふど、俚歌よ、寄せて、女の脚つても無理は有ません、男心と秋の空です、



のどんか男でも大概女よ糾されてソレが爲め言交した女の事も忘れるなどは能く有る事ですがサテ義の固い一段にまッても又男です。女に懸けては男は價値のない者です。さぶる馬鹿な者です。今男から女から互ひよ好あふて惚れ方が五分々々です。時は女の方が弱いが、シカシ女が固惚ぐらゐて男が充分惚れてゐる時は、どうも男の方が弱いが、シカシ世間で男よ惚てゐる女が多い。女よ惚てゐる男が多い。此比例を取つて見ると、先づ女よ惚れて馬鹿な真似してゐる男の方が多い。理屈よなりませう。

すべて疑惑執心嫉妬迷誤などは男よ淺い者です。我田へ水では有りませぬが、男は女と大違ひです。大泣き大泣き笑ふのは男で、小泣き小泣き笑ふのは女です。丈夫無涙など云ふ語も有ますから………の男であるが、ら首釣やら自殺やら爲る人物も餘程氣が小さいので、サテ之からおえこの惚れられ方を擔ぎ出します。處です。之は小説家の袋よ任志て置ませう。

○道樂

「サテ」穴「よ女乃道樂を芝居、菫蕪、薯南瓜と世間で云ふ通り云ひまゝとが、男の道樂は如何ですらうト云ふてみるに、先づ女郎買です。男の道樂と云ふ女



耶買は尤も馬鹿の極點て一翳目よ入らば空花亂  
墜すサアちよつとした迷ひから大しと誤ちを仕  
出らまますテ家庫財産も物おは身命迄も拋出す  
事お有ります一圓一百圓乃金は愚め一家は元よ  
り一生さへもを誤ッて頗ぶる不經濟不品行不所  
存なとを遣おまめす吉原が明るくおれば家は  
聞とめ女郎買ふられて歸る果報者とめつゝとめ  
よ、うめくはまる川竹乃流れの末は借金しやくきんの淵とめ、  
云ふのを皆なソレからの戒めです賢賢易色も尤  
も譯サ、

○癖

男よは澤山癖が有ります力自慢腕自慢もども一  
癖です角力圍碁將碁賭博、かう云ふ癖が有るテ圍  
碁將碁は毛唐人も日木人も之を黜けて居ります、  
見玉へや文選よも博奕論さへ有ますから、

謝肇淪曰古今之戲流傳最久遠者莫如圍碁其迷

惑人不亞酒色木野狐之名不虛矣

又曰世人之戒奕難於戒酒

劉央曰窮閭之下有對奕者施機運神如敵國然  
自且達暮飢不知食渴不知飲勝則怡然負則愀  
然一勝一負所得漠然勝負無得飢渴有畏何以切  
々然哉勝心生也



雲棲曰、二客方對奕有哂於傍者云、吾見二肉柱  
動搖耳客曰何謂也、曰形存而神離在黑白子中  
久矣相對峙者、非肉柱而何客嘿然、

吉田兼好法師乃徒然草云曰、園碁雙六こ乃み  
てあやしくらす人は四重五逆の罪よもまされ  
ること、思ふと或ひじり乃申候こと耳にと  
ゞまりて、いみじく覺ゆる、

之ほど迄よ意見する人が有るよ何とも思はぬ、  
又角力力持足角力腕角力悪ひ遊びです、  
ツレニ又酒の癖三人上戸笑ふたり怒ッたり泣い  
たり遊藝の癖味憎が酸うかる様も聲で清本常盤

津義太夫かど乃稽古嫉妬又は癩癩の癖茶碗かど  
を破り道具を打抛たり、テも困った者サ、百八煩  
惱四十八癖は大概男の所有物です、八笑人も男七  
偏人も又男です、以て男は癖の多いのを知る可  
てせう、

○ますらを大丈夫あど、云ッて生めいた男は意張  
ますが、又男と云ふ者を剛強不屈な者と見へて男  
ささりだの男氣だ乃ト云ひます、だが六尺の禪子  
長しと雖も二ツの罌丸垂すと雖も男らしい男を  
黜いた、幡隨院長兵衛新門辰五郎會津の小鏡今を  
無い昔しめら男の男らしめったもの曰く忠節二



ッ降ッて曰く義心一ッ降ッて曰く客氣ですとサ、先づ之位で終ッて置ないと又どんなことを言出すの知れないおうるしや

「サテ之れおらだ本題の細目に入るので有りませるが作者は随分七月の鎗でデエスおらどうせ旨くは穿ちませんが力の有る限りを遣ッてみませう、ナレドモ燈臺もと闇しの譬へも有るし、ソレよ又た自分乃事をさへ云へば名譽らふい事でも云ひともおいもので……況して叱すのですおら、どうせ云よくい事も澤山です、乃でユウ云ふ事を申し上げる道口上らしふも思はれませうが先づ

云ふて置なげりや、おらおいことが一ッ有ります、だテ、うれえ斯様なことです、

作者を充分あらを穿ッて、みたい乃え一杯です、どうも此册子は紙數に限りが有りまして、ソシテ其上は回数が多いと來て居ますおら、おもふ様よ思ふて居る事が云へんお分りません、ソユハどうの幾重にもお詫おて置ますおら、勘忍して頂戴、

第二回 旦那附車夫

八字髯よ旦那顔して、お手車かごで驅あるいて、おらッおやるとまは、サモお勇ましいいや、細君の心よおッて御覽、ぞ嬉しいだらうよ、もし離縁された細君乃心よな



ッて御覽太公望の嫁アよろゑくサ覆水盆よへらだ  
だ………淨瑠璃で見立てやふふら先づ尼ヶ崎の  
段の太功記乃十日目の初菊よろゑくサ

「アンあ殿御を持かおら」

この情は必ら老發りませう下りの商賣家にて主人を  
旦那との尊敬親方といふを旦那とは下さらふい立働  
きの旦那下女も遣えぬ家の旦那可笑いぢやア有ま  
せんか名詮自稱と名實相違とはあぢあものサ、  
持参金てめ但し又本命九星の相違で妻君と踏付ら  
れてある旦那夜這め他日く言難きの事情あッて下  
女も此られてある旦那下男など品がないとて指さ

れてある旦那、ヘイツ、ハイソと取次よ出る旦那、ハテ  
氣が利かい、ユレハ〜、  
旦那と呼ばれての兒守ふどは先生と呼ばれて唾壺と  
捨てよはく乃と一ツ事です世よは随分妙な旦那も有  
る者です、

○

夏のいらむしよ汗を流し冬乃寒天と涕を垂と二本の  
梶棒と縋り付てタンシヨイ〜と云ッてる車夫日當  
は判任乃末位よはあたつても酒氣が無けりや英氣が  
無いとして一日の勞を慰する毎夜の酒にゲンユ(五錢)を  
費とドテ(十錢)を拂ふおらしてどうもて〜足る氣遣



十六  
ひはなく、お嬢も滅相不経済家で、子守り買喰ひの外に、  
用なく至ッて又懶惰者てす、板の間を働く奴が適有  
るだテ角絞組紐などを遣ッてゐるうちは宜しいが、親  
爺の油などを取る奴は最も怪たる譯てす、多年の鞋  
がけも娘を引延たいたいばかり食ふも乃食はないて  
も三味を習はせ夫婦二人の後生安樂と家福圓滿の希  
望を繫いでゐる者が有る、幌あき毛布あき人力車、足の  
短い車夫、道側よりつゝく車夫、うるさく附纏ふ車夫、酒  
代を貪る車夫、乗客よ話懸る車夫、いやなものさね、

第三回 下男

竹箒も持めきた下駄も揃あきた羨ましいのは食客の

磯呂殿、朝も晩いゝ夜も早いと、身は樂かきソレて未  
小言を云てるよ、時々お嬢がアノ涼たい眼で、チロリギ  
ヨロリアノ色白面長な磯呂殿、氣の有そうな風、いじ  
らしやく、いくら思ふたッて磯の鮑、たおもひ、お庭  
の櫻をるよ、折られど猿猴の水乃月、せると捕られど其  
處かめ、不埒千萬、近頃心外な、ハテ無念骨髄な徹す  
るぞ、

まぢまをげざるよ、期せどして萍水相逢ふ、大和國の名  
物、もとより風來乃おさん之よ、とばかり、花の吉野  
やまゝの親切乞食もあらど、穢多よもあられど、素  
性定めあらぬは、此方も同然、木子餅、柵から牡丹餅、二階



めら目薬何よりもて来いの話、近頃尤も上分別な事  
と考へ、下男が下女と鏡、天真のお樂しみ、

因よ云ふ、之めら次は酒屋男茶師なども込みて  
遣ッつけませう、

春の末つめた出て来る茶師冬の初めよ、ヤッて来る酒  
屋男丹波女よあらば、相摸女の尻よつき、一年一度國  
を出て、ソレツ限り歸らぬ者が有ります、之も下男の一  
列元より弟たり難く、兄たり難くて、殆ど自由結婚の實  
行者です、鼎軒田口君が嘗た日本の下等社會の食法は、  
歐米人の………と能く似てゐると云はれ、また恰  
好乃通り下等社會の縁組は自由結婚サ尤も不完全

不規則か………妙てすねエ偶然あふてゐますのえと  
てもく、

明治の清少が枕草紙の中 人は有心よして、無  
心なる體をめぐるものなり、朝早く下男が門掃ん  
とて箒もちつゝ立ゑる、ト書いてある、

第四回 食客附録夫

「食客茶あついでして飯を填め」居候こげが好ぢやとタン  
ト食ひ「居候名は大將と敬められ」食客も「ドン過と獨  
言」ふど、狂句は何時も引出されて何の彼乃ト云れて  
ゐるが、食客ほど薄命不幸な者も有りません、女の食客  
は又しも男の食客ほど厭はれる者はあゝい、



「時として留守を托まれると御手前一人の留守事して、何や彼らの盗み食」遠慮しながら文句を付て乃物食ひ「入目乃おき折よおさんよ口配せしてお飯もう一杯「機を見て食はざるは勇あーとてあふた時肩の大食「駱駝よろしくの反芻獸みた様な食置き「食客先生よ非老ば、迎もく誰が真似が出来やふぞア、男よ生れたら、食客よはなるまじく、氣兼氣苦勞氣忘んどう思ふて不、言戀の夫ならなくよ、人乃知らない心配が澤山てす、世よ薄命不幸食客より甚だしい者が有ませうか、ヨシヨシ、是よ好一對が有ます、

ソレハ即ち 鯨夫

鯨夫ほど薄命の者は有ません、去年の一月、昨年の婦を死なせ、涙の中よ思も明けたが、サテ獨寝が淋しいお伽は無きお伽より何より先づ擲鼻禪乃洗濯をせよば、強は思ひ氣の逗留すること半年、火ともしたり飯たり、繋忙を極むること半年、雪隠棚元は女は産が輕いとやら云ツて悦んで掃除をするが男一人てソレもせよ、ユルリと外出は出来、ソルくと彷徨ことは出来、あつこの旨い物くふあと出来、着物た、むと出来、今よ到ッて始めて知る妻の恩——ソレも便利——ソレも經濟——ソレも取締の上から考へて……



天竺浪人で萍草のやうな彼方な此方な漂ひ流れたり、  
 又た稱妻のやうな東へ西へ光ッさりしてゐる定めな  
 き宿をまらぬ飄泊者むつかりふ云ふと居處不定の輩  
 らは獨り身の氣樂な慣れて女や金なは不自由せねば  
 イナ不自由を感じねばタマニ家族イナ親戚と云ふ者  
 な遇ふさへ目の上の瘤のやうに思えますが有りつ  
 けた者が無くあつては茶碗一ツでさへ淋しいもの況  
 して一箇乃人が無くなつては………妻が無くなつ  
 ては………況して子の有る鰥夫其子は期せざして  
 自由教育尤も放任主義の極なる自由教育

第五回 俳優

男娼乃綽名も無理でない娘や寡婦や藝妓ふどを蕩し  
 誑めし某亭の奥坐敷に眞猫を極め築地などの暖昧家  
 な色と慾との兩テンピンで無法の祝義を貪る古は之  
 を河原乞食として滅相いやしみましたか時折折  
 て芝居をシエタ俳優をアクトルと云ふて何だの彼だ  
 のト四角張つた連中が持囃すやうなふつたから俳優  
 も少しは直打がたましよ  
 東で福チヤン大坂で鴈チヤン董賢ら彌子瑕の梅曆乃  
 丹次にあらざれば在原乃中將業平婦女社會で大した評  
 判俳優なあらざれば女を泣すは流季の世では先づ難か  
 しい昔一田之助を坊主な取つつかれ今も秀調は弓屋



の娘を憧れ死させた。

「舞臺での色目殊よ身體を様子する『女形のいやに造り  
聲する』氣をあせつて臺詞を遣ふ『他優の演藝中の呬語』  
幕の開ける中よ欠伸などする『いづれも宜とくかいこ  
やです。』

俳優も昔の影陽とは少し勝つてゐるがシカシ昔し  
影陽のおこつた原はと云ふと、ツマリは俳優が有つた  
から乃事て、……男娼の名も多分ソレから來る者と見  
つます。

つきだしの若い時、から茶瓶頭乃別鑑札よなるまで色  
氣の有るのは俳優です、如何も俳優は、年を老ても婦人

社會よ莫大乃勢力が有る者です、如何も俳優は、顔が悪  
くても、女性よ思ひ付れるのは妙です、舞臺顔で人氣を  
引立て、歳貢を取立て、素顔で女を艱ませる、ホントよ罪  
です、ね、エ、今乃俳優よ、一世二世の團中郎又え昔の  
市川鯉十郎のやうな剛勇者は先づ無いです。

一世團中郎、鼓打役の杉山半之丞と云ふ者に怨ま  
れ、幕うつ引く事をす時、刺殺されたれば、二世團  
十郎舞臺よて其仇を殺したり。

鯉十郎生田傳八を演じ、其仕打を以て見るに忍び  
ざる者と思え、れ、烟草盆を投付られたり、  
序に市川家乃十八番を左に記置ませう。



不破 鳴神 不動

助六 暫らく

外良賣 矢の根五郎 景清 關羽

七ッ面 象引 録影 解脱

抑戻 鉦 蛇柳 勸進帳

又た新十八番と云ふのを

琴吟物語 虎の巻 蓮生物語

桃山物語 支那譚 真田張拔傷

雨の鉢の木 陣太鼓 琵琶法師

重盛諫言 釣狐 之丈です

もとより我國には、ブリス、アール、ピングを無い其代り、關州、梅幸が有る何處の國ても、さう俳優が好い者

でも無いから元より多少ゆるは有るが日本の俳優衆

のやうなものは、澤山あるまい、

世を否な天は、不公平な者、俳優は女、飽きるばかり

で、やめめは女、振られるばかりです、雲の上人、側近

う侍べる女房達より、井戸側のお鍋までが、之を評判す

ること、西洋より多くあることです、殊に日本おどて

は、學問、凱旋、勝誇り、鼻ピコつめす、女生徒さへも、

陰、陽、俳優を評判して、何さん何ちゃんと呼んで居

ます、實に俳優と云ふ者は、多幸多福な者です、夫れだめ

ら……我等を悪まれ子、世に憚ります、アハレ

彼等も天死します、多見藏のやうな、長壽した者は、先づ



波多よ有るまいでせうよ。

第六回 滑稽者

二輪加師落語家など滑稽を以て世渡りするも面白い、  
幫間箱丁も滑稽者よは相違なけれど、六尺の禪二ツの  
畢九の手前でも出来ぬい聖だテ、  
いつの頃ですの都某といふ幫間が妙なソレも滑稽た  
羽織を着て居ましたどう云ふサさん……

て も お  
ら う

右の圖は五ツ紋の羽織で裏の左乃袖の、一ツの紋  
丈は鼠のひいゝ體て之を左の表の袂よあらはし  
たのです、

この都某しと云ふ幫間此羽織を着て或時客の座  
敷へ聘ばれましたが客も白物忽ち信と羽織乃紋  
よ目を付けて、

オヤお前は其羽織乃紋を一ツどうした、

へ、之でムいやすの之は私が先日金よつまり

した時に之を質に置きましたたところが、トッ

ト鼠が引ましてコレ此通り

ト云ツて袂を見せたりです、



可笑しい奴では有ませんが、カレト云ふ事も、外面は氣樂らゝい、が決して然らば有りません、放蕩を仕盡した曉きてなぐては、迎もく、幫間や又箱丁などよえなれません、

二わのよなべて言葉遣ひ乃、舌き「醜き身振する」身分不相當なる振する「すべし人に指とさ、れてゐます、落語家口の廻らぬ「喋舌り過ぎて言葉を間違はる」シテツメらと故意、漢語を講れを「此社會銀の職計ふと、ぶらさげたり、美服を纏ふたりすると、ツイ不揃ひです、自然人は、あゝの落語家、あゝ奴は、二輪加師だらう」と鼻は掛はります、

幫間でムレ箱丁でムレ、二輪師でムレ、落語家とムレ、自分か心持次第で随分おもしろい、がシカシと云ふ者、に限って教育が皆無です、から兎角、よ下品で仕方が有ません、ホントよ世間よ、妙な者が有りますね、エ、とりとは無用の長物サ、ね、

第七回 商人

商人ほど妙な者な者ません、商人は機敏な癖よ、グツグツした處が有ます、一錢や五厘の事とさ、へくぢく云ひます、極きたない根性を持つてゐる者です、商人で奇麗な根性を持つてゐる者は、相場師位です、

GREAT SOCIETY IS GREAT EGOTISM



で西洋人は能く儲ける代り、能く費ひも仕ます。日本  
木人、能く儲けません代りに、能く費ひません。デスカ  
ラ日本乃商人、ほど意地汚い者は有ません。頭を垂れ腰  
を卑うして、出入する家へ往た時、え、病犬乃やうです  
が、ソレでも手代や丁稚を遣ふは、随分權平ばる癖が  
有ます。

商人は儲かッても、決して儲かるとは云ひません。掛直  
を云ひ乍ら原が切れるふん、あとな、え、紋切形の臺詞です  
損を爲れば、大きく云ふて之を觸れます。儲けると云  
ふふとが有れば、損を爲ると云ふことは、當り前です。シ  
カシ商人は決して、うそいふ事は云ません。

「店を廣げ乍ら、キヨロリカンとしてゐる」取引の緩慢な  
る「請取狀、手紙など乃書けぬ」お世辭なき「チヨットとて  
も顔ふくらせる」之は、どうです。アレは、どうです。と、勸め  
ざる「人を矢鱈な疑ふて、信用貸せざる」容を待せる「ツリ  
錢の無い」店の者が、客を見て笑ふ「客の居る」呟語いふ  
最も宜きくふい事です。何でも商人と云ふ者は、色氣が  
有ッて、ソシテ愛嬌が無ければ、ありません。腰を卑うて  
も、髭乃掃除までして、諧ふは及びません。需用あれば  
供給あり、供給が有ッてこそ、需用も足る者だト云ッて、  
別り高ばるには及びません。賣る爲に客を待つ見世乃  
代物、ソレを只氣短あどをおこして、賣らぬのは、ツマ



リ心得違ひの最上ですぬエ、

第八回 職人

唐棧の著物や衣てゐる商人が紳士帽を被つて料理屋に酒を飲み廓を轉進を買ふて贅澤を志てゐる時節、職人丈は未だ依然たる古風紺乃袴纏に紺乃腹掛紺の股引で鼻ッ先は煩冠り、

冷評志や野暮ても遺粟や上手だ、

今朝も七ッ屋てほめられた、

商人は職人の手は、職の有ることを羨みますが職

人よ志てみると暑いよつけ寒いよつけ商人を氣

樂なト羨んでゐます、ユはふべて乃人情ですが何がサテ職人根性と云ふ者は商人と違ひ、其日ぐら志が多い乃てす宵越の錢は遣はねエと、云ふ風なのです、ソレだから職人は酒や色は耽つて迎も々萬一を慮かッてゐる者等は有りません澤山儲けた時は、四日でも五日でも遊び廻つてゐます、經濟家よ云はせると其手は生産的で、其人は不生産的てす、先づソレが多いてす、總て此無形乃力量を賣ッて、生計を立て往く者と云へば、大概は其力量を頼んで、放蕩な流れ易いテ、

第九回 役人附兵卒



我國ではお役人くとして敬みて遠ざける風が有って、  
 宜しくない金モールぶきの洋服を着けた勅任官から、  
 腰辨當のお雇ひまで役人とさへ云へば何だか恐ろま  
 氣な仕てゐるのは妙です、  
 新橋や柳橋の紅裙は髻もお目玉もおじかいて咫  
 尺も奉つてゐるではおいひソレも何ぞや平身低頭で  
 畏まつて我々人民が只一極も黙つてばかり居る者で  
 えかひ随分ソレ丈の禮を以てする日になれば、お話し  
 やふが議論をしゃふが又骨牌トランプを志やふが構  
 は志かいテ、

お役人乃こわい物兎も似た字、一は地震新聞屋、

お役人の好きふ物以前を月の十七日新任の沙汰大坂  
 でから旭舉の懸物石燈籠松樹梅樹などです、  
 「小役人の風來車に乗って歸つて来て表から「お歸り」  
 と車夫も云え志むる」小役人の無暗に意張ちら「小役  
 人の髻はやせる片腹痛い、

〇  
 兵卒さすよる氣乃利た親がなぜに登樓乃金くれんか  
 ンめと浮れ込んで日曜や水曜は、ブラリくとして、



三々五々隊を組んでゐる兵卒某甲は豪農の息子、某乙は豪商の悴れ、數百數千數萬の人の中では、素性の知れぬ者が多い、ナレドモ大體は坊ちゃんなどで、日曜毎のおめてが、ひが足りふいと國から爲替を受取つて、松島へ豊中へ浮れ込み、身まゝにならぬ籠て鳥のやうな思ひをして、不覺な事を仕出かします、ハテ獨逸かどてえ、兵卒と來ちやア、婦人社會の大もてで、色の淺黒い處、大變な價値が有るううです、ソレと云ふのも皆を勇み立つて、兵卒よなるからの事、軍人は護國の干城だト、皆が思ふてゐるからの事、.....日本入を生別れのやうと思つて、故意と作病を志たり、

自體を不具よしたり、馬鹿げた事を仕ます、ソレだよ因つて、往々大變な臆病者が有ります、ナボレナン嘗て云ました、余を慄悍ある魯兵に將さち志めばと云つたのは、我が將校にも其想ひが有るかも知れない、ア、兵隊さんエ、玉ちる劔ぬきつれて死ぬる、覺悟で.....ソレ進めや進め、

第十回 僧侶

頭が圓いからって、油断は出來ぬ、ヘラ、の連中、頭の圓い藝人が有る、腦病の人を多く坊主頭よなつてゐる、衣きてゐるからって、安心はからぬ、男娼の名ある俳優、優てさへ著るから、



肉食妻帯のなら無ツる昔とえ違ひ今を寺で牛肉の  
臭ひがする「ダイユク」と云ツて業ふゆい女人が居る目  
玉乃飛出さ口の曲んだ黴毒性何位乃有難くない坊様  
が有る酒を飲み女を買ふ學林の佛弟子殿がある、  
今の時よ死んで往く不幸者引導うけても夫丈の功德  
はない經誦んで貰ふて有難くもない會葬者ふどは  
殆んど興醒顔です誰が成佛いたしませうぞ、

「坊主の様子してゐる」色目なごを遣ふ「身姿を華美にす  
る」喧嘩する「争論する」高慢なる「經を知らぬ經卷に頼る」  
「供養寄進を頼める」自分より言出して寺塔を建立する「  
頭よ帽子を載ける」足よ靴を穿ける「巻烟草ふどを喫せ

る」朝夕乃讀經を惰れる「寺内を不潔とする」先づ之位で、  
勘辨をて置きませう、

一轉して、アーメンの坊様之は又た……………  
「好まぬ人よ教旨を説聞する」さも殊勝よ祈禱する「説教  
をくどくしくする」自問自答の體よ下らぬ事を復習  
する「強て其道よ引入れんとする」すべて忌えしい限り、

オ、好んシ、  
忘れましたが嘗たナンナリイと云ふ書物を見た事が  
有りましてたがこれは彼乃カトリック宗を脱した尼が、  
自分の履歴を書いた者の様でたが、アんな書物を讀  
むと何がサテ宗教信者だツて耶蘇の徒弟だツて釋門



の宗徒だつて、ホントよ的よはなりやしおい作者は宗  
旨嫌ひで常よ此輩らと不快よ思ふてゐるのです、習舞  
鶴偏痴解吟僧亦俗を微吟いよしたい、

目次の外

男らしい男

上の如くよ言去つて、男のあらを書列べてみると、サテ  
男らしい男といふ者は、世乃中よかいやうな理屈サウ  
こだテ、聞き玉へよく、

男らしい男と云ふのは、どんなの云つてみやふ  
か驚くまいぞく、

馬車に乗る男(但し馬丁にやないぜ)否なく、

金モールを付けてゐる男、

金のほる男、

女乃惚れる男、

腕力のある男、

學問のある男、

華族の士族の平民、

富みを積みし陶朱もとより男でかい、アンか吝嗇坊……

……命を捨てし屈原もとより男でない、アンな小心者

……女よ惑ひし項羽もとより男でない、アンか落武者

……人を虐げし樂紂もとより男でない、アンな無法者

……佛よ媚び志馬子もとより男でない、アンな浮氣者



敵を殺されぬゴルドンもより男であらう、アンな  
弱武士

富貴は浮べる雲の如しだ盛者も必衰の理りよ支配せ  
られてゐる浮世如何な果敢なき頼み甲斐なき形氣な  
き情け無き此浮世もより蜉蝣は乃一生人命は朝露の  
如しおんろと珍文漢語にも有る通り短い幕の芝居で  
ある此浮世も嘗て男らしい男の有った例はないべし  
ユンでもナポレオンでもガリバルダイでもカンベツ  
タでもホントは男らしい男じゃあない然らば男らしい  
男は……  
さればです、猛き武士を多くは物の哀れを知りません

物乃哀れを知らない者は非人です花乃うつらふ様よ  
さへ心を痛めてゐる乙女を愛らしとも何とも思はな  
い者は……露ほども女に對して情乃無い者は男であ  
つて男でも有りませんソレじやと云ふて慾や色を増  
長させて之を恣いませぬ爲る人も又男らしい男でも  
有ません

もとより過失と云ふとは誰にも有る事であつて、お  
いと云へない者です、作者は過失が有るからつ  
て男らしい人を男であいと云ませぬ、過失が一ツも  
無いと云つても男らしくない人を男らしい男だトハ  
云ません、サア試してみると、ホントに男らしい男と云ふ







二  
 は女子之を讀んで驚く可く悟る可きあらは男兒之  
 を讀んで驚く可く悟る可きあらと穴の二書は元より  
 一家に缺く可からば一家の夫婦にして之を繕はば双  
 方とも顔うち赧らめ庶幾くば其後はチシク喧嘩  
 を爲ざるならん歟

己丑之歲春王正月

友人 花山長者 誌

版権登録

全 明治廿二年三月十七日刷成  
 年三月十九日出版

版 有 所 權

著者兼發行者

大阪東區内本町二丁目百卅九番屋敷  
 敬文堂 藤谷 虎三

印刷者

大阪東區高麗橋五丁目四十五番屋敷  
 聚文舎 大垣 彌太郎

發賣者

大阪東區唐物町四丁目十二番屋敷  
 明玉堂 岡本 仙助

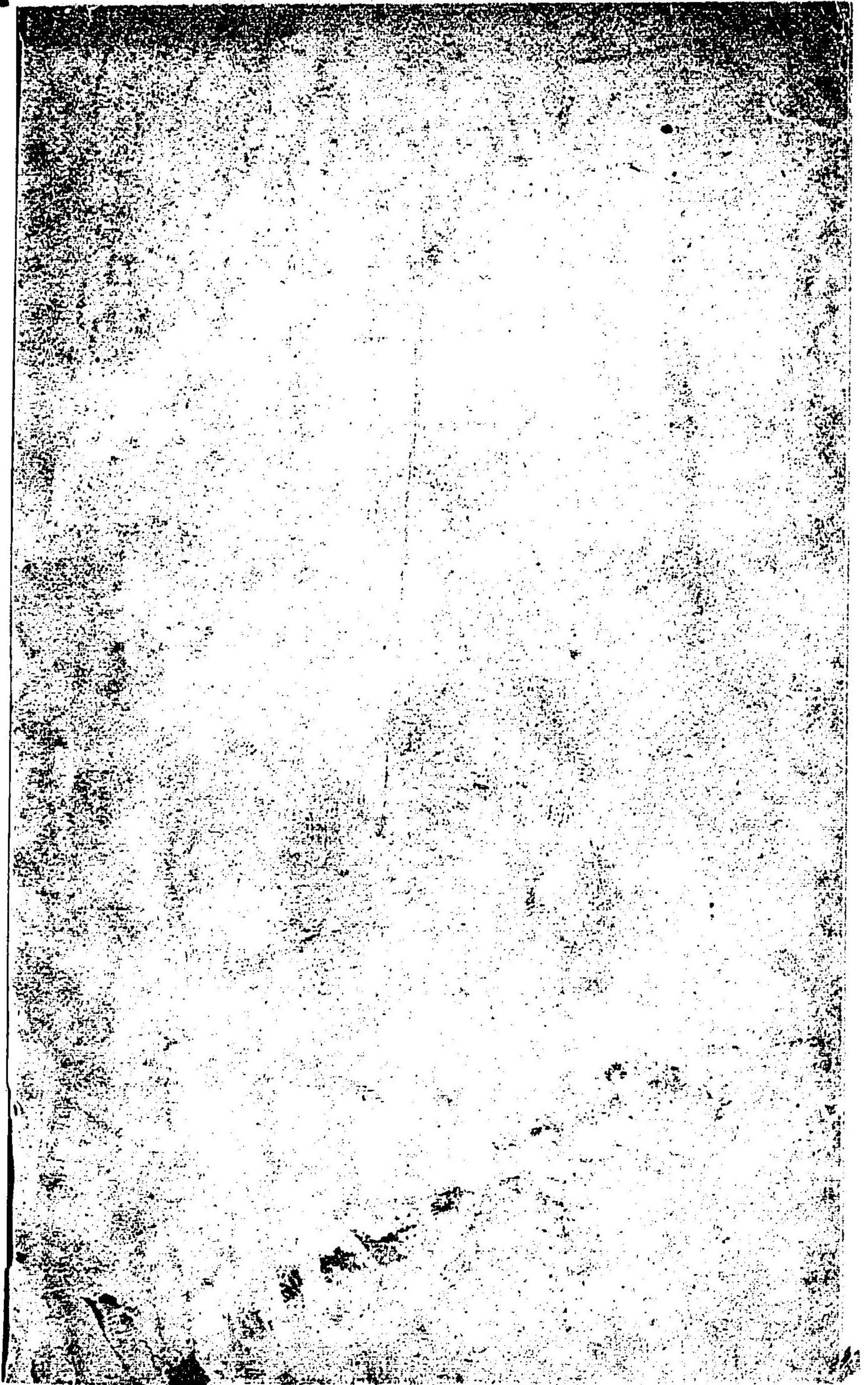
發賣者

大阪南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷  
 競争屋 中村 芳松

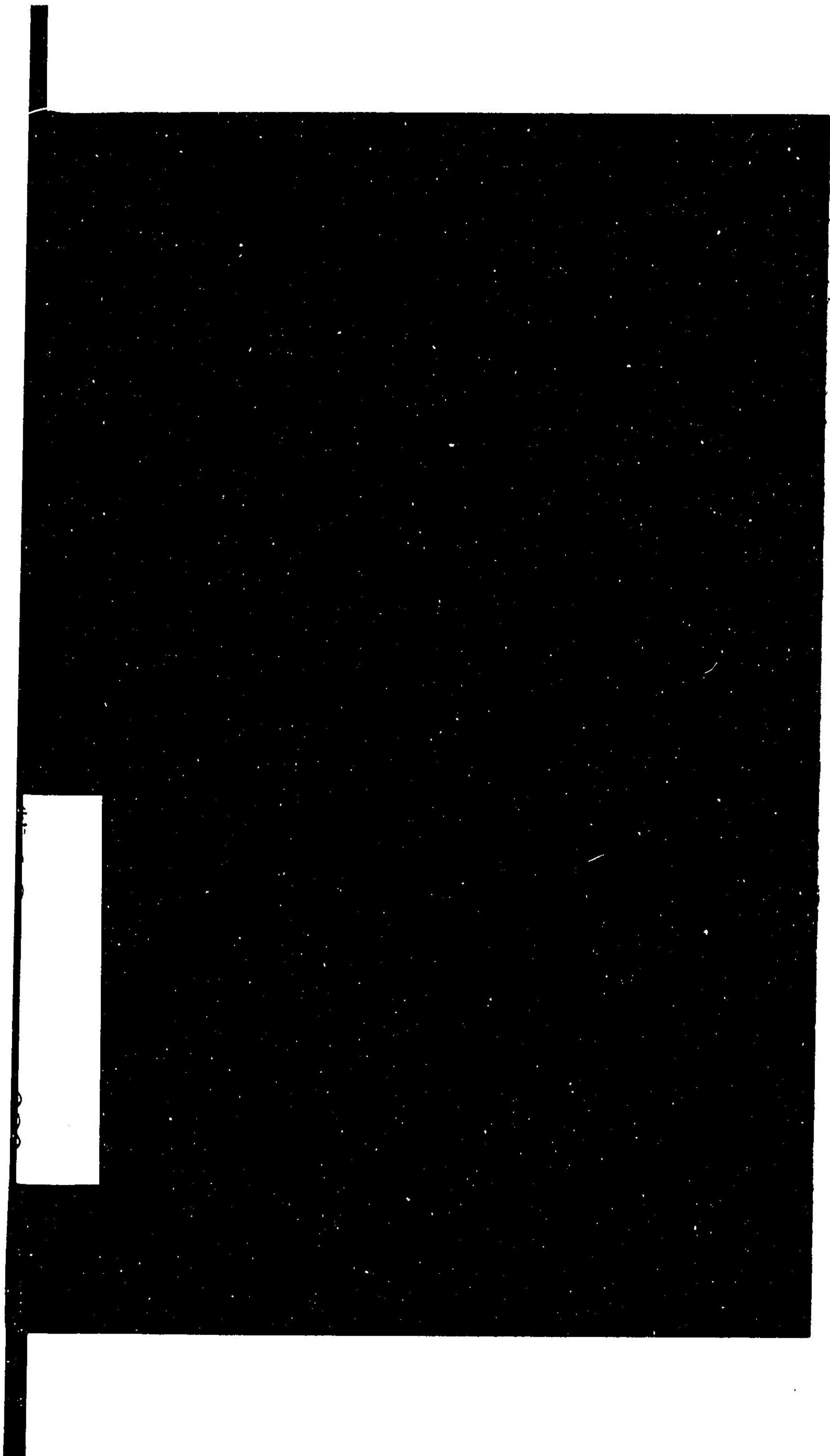














特43

938

鯨

国立国会図書館

091569-000-2

特46-938

鯨

素鉄公/著

M22

DBO-0013

